



## 建学の精神

新島襄は、同志社設立の目的は「普通の学問を教えるだけでなく、徳性を磨き、品性を高尚にし、精神を正しく強めるように努め、ただ技術や才能のある人物を育成するだけでなく、いわゆる良心を手腕に運用する人物を産み出す」ことにあり、この教育は「ただ神を信じ、真理を愛し、他者に対する思いやりの情に厚いキリスト教の道徳によらなければならないと信じて、キリスト教主義を徳育の基本」としました。また遺言の中で、「同志社教育の目的は、神学、政治、文学、自然科学などいずれの分野に従事するにせよ、どれもはつつたる精神力があって真誠の自由を愛し、それによって国家につくすことができる人物の養成に努めること」と述べています。

このような新島襄の志を受け継ぎ、同志社は「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」による「良心教育」を建学の精神としています。



同志社 校章・マーク：国あるいは土を意味するアッシリア文字「ムツウ」を圖案化したもので、知・徳・体の調和を表わすと解釈されています。考案者は、詩人であり古代オリエント学者である湯浅半月（吉郎）。

## 学校法人同志社

京都府京都市上京区今出川通烏丸東入玄武町601

TEL：075-25-3006 FAX：075-251-4980



## 創立

1875年(明治8)8月、新島襄は山本覚馬と共に〈同志社〉を結社しました。同年11月29日の朝、新島は私宅でアメリカン・ボードの宣教師デイヴィスと6名の生徒と「涙あふれる熱心な祈り」を捧げ、官許同志社英学校を開校しました。翌年9月には、薩摩藩邸址、現在の今出川校地の新校舎で〈熊本バンド〉の青年たちも迎え、本格的な授業を開始しました。ちょうどそのころ、女性宣教師スタークウェザーと新島八重によって女子のための私塾(京都ホーム)が京都御苑内のデイヴィス邸で開設。1877年(明治10)4月〈同志社分校女紅場〉となり、同年9月には〈同志社女学校〉と改称され、同志社の女子教育が本格的にスタートしたのです。

1888年(明治21)新島は「同志社大学設立の旨意」を公表して大学設立への協力を呼びかけ、募金運動を展開しました。しかし途中で病に倒れ、1890年(明治23)1月23日神奈川県大磯で遺言を徳富蘇峰らに託して永眠。しかし、その遺志は卒業生を中心に受け継がれていき、1912年(大正元)専門学校令による大学、さらに1920年(大正9)には大学令による大学が認可されたことで実現したのです。

同志社女学校も、1888年(明治2)普通科の上に専門科を設置し、1912年(大正元)には専門学部、1920年(大正9)には同志社女子専門学校と改称、1949年(昭和24)の同志社女子大学の開設へと発展しました。1896年(明治29)同志社普通学校を同志社高等普通学校と改称し、新たに同志社尋常中学校を開設しました。また1897年(明治30)3月、出町幼稚園(現・同志社幼稚園)が開園。1943年(昭和18)尋常中学校が中学校令による同志社中学校となり、1945年(昭和20)4月には中学校令による同志社高等女学校も開設。太平洋戦争後は、新制による同志社中学校、同志社高等学校、同志社女子中学校、同志社女子高等学校、さらに1951年(昭和26)の同志社香里中学校・高等学校、1980年(昭和55)同志社国際高等学校、1988年(昭和63)同志社国際中学校、2006年(平成18)同志社小学校、そして2011年(平成23)同志社国際学院の開設によって、「幼稚園ヨリ大学ニ至ル」一貫教育の確立を切望していた新島襄の夢が実現したのです。

## 創立の背景と歴史

新島襄は、1843年(天保14)、神田一ツ橋の安中藩邸で下級武士の長男として生まれました。そして、あの幕末の激動の中で漢学や蘭学を学ぼうちに憂国の情を抱くようになり、西欧文明とキリスト教を学ぶ志を立て、1864年(元治元)6月14日の夜半、国禁を犯して函館から脱国し、一年余りの後ボストンに着きました。そこで、ニューイングランドのキリスト者たちの温かい支援を受け、フィリップス・アカデミーで学ぼうちに洗礼を受け、キリスト者となりました。卒業後、アーモスト・カレッジで学び、日本人初の理学士となりますが、さらにキリスト教の牧師・宣教師となるべくアンドーヴァー神学校へ入学し、本格的にニューイングランド神学を学びました。その在学中、新島は岩倉使節団の書記官として1年余アメリカ、ヨーロッパを回り、欧米諸国の教育制度の視察や調査を行ないました。

これらの経験をとおして、新島は欧米文明を根底から支えているのはキリスト教の信仰と道徳、それに民主主義を体得した自治自立の市民たちであることを明確に意識するに至ったのです。そして、そのような人間を育成する教育こそが日本の近代化に必要なものとして、1874年(明治7)9月、アメリカのラットランドのグレース教会で開催されたアメリカン・ボード(外国宣教団体)の年次大会で、宣教師として帰国する挨拶の中で、日本にキリスト教主義の学校を設立したいと涙を流しながら訴えました。会衆はその訴えに感動し、当時としては大金である5000ドルもの献金が直ちに捧げられましたが、その中には、老農夫や貧しい農婦が捧げた婦りの汽車賃にあたる2ドルもあり、のちに新島はこれらの2ドルに強い感動を覚えた、と何度も語っています。

新島は、キリシタン禁制の高札が撤去された翌年の1874年(明治7)11月に帰国し、キリスト教の福音を宣べ伝える活動を開始するとともに、キリスト教主義の学校を設立するため、大阪で宣教師ゴードンの家に寄宿し、その可能性を探りますがうまくいかず、1875年(明治8)4月京都へ入りました。山本覚馬と出会って胸の内を打ち明けると、山本は新島の志に直ちに共鳴し、協力を申し出たのです。それは山本がゴードンから贈られた『天道遡源』を既に読んでおり、日本の近代化のためにはキリスト教の道徳が必要であることを悟っていたからでした。そこで、新島は同年6月から山本の家と同居し、8月には山本とともに〈同志社〉を結社し、私塾の開業願いを京都府に提出。11月29日、同志社英学校を開校することができました。

明治政府が国家主義的な仕方近代化を急ぐのに対して、新島はあくまでも市民による近代化を目指しました。このことは、新島自身が次のように述べていることから明らかです。「一国を維持するのは、決して二、三の英雄の力ではない。実に一国を形成する、教育があり、智識があり、品性の高い人たちの力によらなければならない。これらの人たちは一国の良心とも言うべき人たちである。そしてわたしたちはこの一国の良心とも言うべき人々を養成したいと思う。わたしたちの目的は実にここにある」。



創立者 新島襄(1843~1890年)  
「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来タラン事ヲ」という新島襄の願いが、正門に建っている「良心碑」に刻まれています。

